

資料提供

(県政担当・田辺記者クラブ同時提供)

令和7年1月14日

報道関係の皆様へ

(公財)南方熊楠記念館

館長 高垣 誠

南方熊楠記念館 新収蔵資料「川島草堂画 南方熊楠賛 黒いもり扇面」・ 1920（大正9）年南方熊楠高野登山写真（複製）

南方熊楠記念館ではこの度、「川島草堂画 南方熊楠賛 黒いもり扇面」（1920年）を岡山県の所蔵者より寄贈を受けました。

報道関係の皆様におかれましては、令和7年1月29日（水）午後2時から、この新収蔵資料に関する説明会を南方熊楠記念館（西牟婁郡白浜町3601-1）本館2F展示室にて実施いたしますので、ぜひ取材いただきますようお願いいたします。

なお、この時間にご都合のつかない場合は、電話で担当までご相談ください。

記

【説明会】

開催日時：令和7年1月29日（水）午後2時から

開催場所：南方熊楠記念館 本館2F展示室

【新収蔵資料概要】

「川島草堂画 南方熊楠賛 黒いもり扇面」は岡山県倉敷市出身の植物学者宇野確雄の自宅に保存されていたものである。宇野確雄は1920（大正9）年に南方熊楠らとともに高野山に登り、植物採集を行った。

今回寄贈された資料は、宇野が高野山へ同行した際の写真（複製）と、「川島草堂画 南方熊楠賛 黒いもり扇面」である。扇面は元々扇子だったものを宇野の子孫が軸装した資料。当時の熊楠の日記をみると8月22日に和歌山市の南方家（実家）へ行き一泊、翌23日に高野山へ熊楠、川島草堂、小畔四郎、坂口総一郎、宇野確雄と登っている。高野山では熊楠らは土宜法龍との面会の他、植物や菌類を採集している。8月26日に小畔、坂口、宇野が先に高野山を下りる際、熊楠は川島に扇子に絵を描かせ、狂歌（都々逸）を3人に与えている。

熊楠日記8月26日「小畔、坂口、宇野三氏荷造りす、此間小畔氏と話す。同氏より百五十円受取る。三氏の為川島画、予狂歌^{都々逸}ど一等扇面にかき与ふ。十時頃三氏出発、予川島氏と寺門迄見送る。」とあり熊楠が宇野に渡したことを記録している。小畔、坂口のは発見されていないため、非常に貴重な資料といえる。熊楠は高野登山の途中、及び滞在中に様々な人の扇子に狂歌を書いて渡しているが、いずれも発見されていない。

特に「黒いもり扇面」には、川島草堂画の黒いもりと、南方熊楠の画賛「黒やきになるまで 思ひを こがして見ても 佐渡の土ほど きかぬもの 熊楠」とある。歌の解釈は、イモリの黒焼は媚薬に使われていた、佐渡の赤土は止血剤として使われていた、どちらも薬として使われたものだが効果はない。「黒焼になるほど思い焦がれても、思いだけでは何の効果もない」という意味か。この都々逸は、即興ではなく明治44年の和歌山新報への投稿に同様のものを見ることが出来る。秀逸だとさる方から褒められたという熊楠の自慢も書かれている（全集 6巻 14頁）。

また大正12年の熊楠の論考にイモリの黒焼きは、ほれ薬になるとして、日本から英国に輸出されていると書いている。

＜お問い合わせ＞（公財）南方熊楠記念館
担当:三村(みむら) 電話:0739-42-2872